漢長安城桂宮３号建築遺跡の調査

調査の経緯と概要　当研究所と中国社会科学院考古研究所は、1991年度以来、中国都城遺跡の共同研究を進めている。第２次友好共同研究の４年目にあたる1999年度は、漢長安城桂宮３号建築遺跡を発掘調査した。

桂宮では、すでに1号から12号までの建築遺構を確認している。1997年度の２号建築Ａ区の共同調査では、桂宮の正殿と思われる大規模な遺構を、1998年度の２号建築Ｂ区の共同調査では、正殿の背後に位置する遺構をそれぞれ検出し、桂宮中枢部の様相が明らかになった。

本年度は、２号建築遺跡の北約1.2km、桂宮の北半部に位置する３号建築遺跡を調査することとし、南北84m、東西24mの2016m²を発掘した。調査は1999年10月に始まり、厳寒期の中断をはさんで2000年５月まで行った。当研究所からは、1999年10月から12月にかけて深澤芳樹・西山和宏が、2000年2月から3月にかけて小澤毅・山下信一郎・牛嶋茂が参加した。漢長安城考古隊からは、李毓芳（隊長）・劉振東・張建鋒の各氏が参加した。調査自体は小澤・山下・牛嶋が現地を離れた以後も行われており、この報告はその時点までの知見であることを断っておく。なお、発掘調査の最終成果は、『考古』2001年第１期に掲載の予定である。

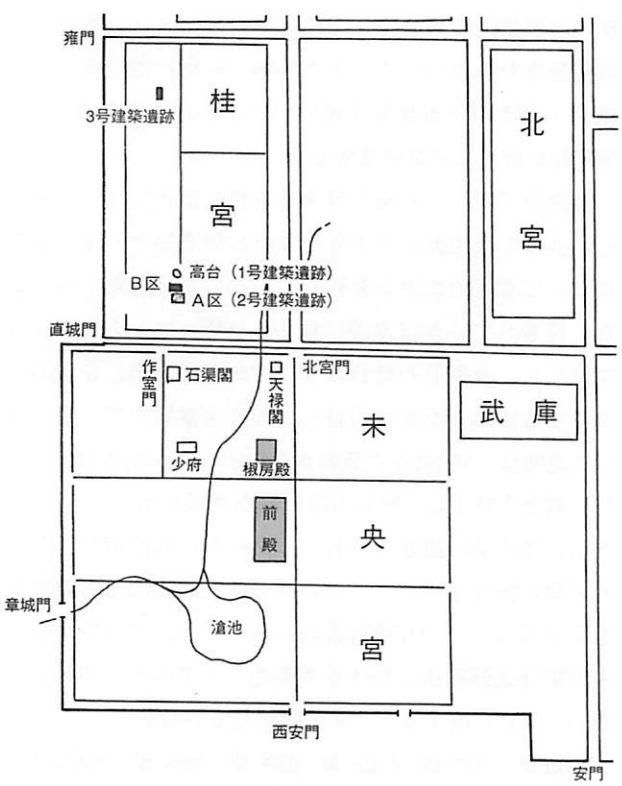

図１　漢長安城西南部

図２　倉庫６の門扉地覆痕跡（北から見る）

本年度も昨年と同様、日中双方の発掘調査方法の交流を図った。日本側はトータルステーションを使用した測量と遺構図の作成、6×6判カメラによる遺構写真撮影などを紹介した。それとともに、中国側の発掘調査方法として、気球を用いた空中写真撮影や簡便な撮影用梯子の使用などを見学した。なお、掲載の遺構図は、日本側作製50分の１遺構図をもとにしたものである。

調査地の基本的層序は、上から耕土、包含層の順で堆積し、地表下約0.5mで建物の版築基壇上面、同じく0.9m程度で漢代の地面にいたる。なお調査区全体にわたり、地表下約2.4～2.8mの深さまで、全面をつき固める地業が施されている。調査の結果、検出した遺構は、建物基壇２基、倉庫７棟、塼積暗渠１条などである。

建物１　調査区南端で検出した版築基壇（台基）をもつ建物。東西約14m、南北８m以上で調査区外南に延びる。基壇高は約0.5m。基壇上で礎石（暗礎）を１箇所確認した。縦約1.2m、横約1.0m、厚さ約0.4mの石の上に縦横約0.6m、厚さ約0.2mの石をのせたもの。

建物２　調査区北半部に位置する版築基壇をもつ建物。東西約17m、南北約31m、基壇高は約0.5m。基壇上で３箇所礎石を確認。基壇西側に、西から基壇に登る通路（斜道）がある。幅約1.8m。勾配は極めて緩やかで、敷き詰められていた方形塼（一辺36cm）が一部現存する。

倉庫群（倉庫１～７）　建物１と建物２との間で、東西方向に細長い建物を７つ検出した。倉庫であろう。このうち倉庫２～７は、倉庫1･2間の隔壁の東西に取り付く隔墻と、建物２の東西に取り付く隔墻とによって囲われていたと考えられ、倉庫１とは区別されよう。倉庫1･2

図3　塼積排水暗渠（西から見る）

間の隔壁東側の隔墻は幅約1.3m。隔壁西側の隔墻は幅約1.0mで、約3.5m分が残存する。建物2の基壇東側の隔墻は幅約3.1mで、調査区外東方に延びる。基壇西側の隔墻は幅約1.1mで、約3m分が残存する。各庫は、版築による分厚い隔壁（残存高0.3～0.5m、幅は庫ごとに異なり、最小約2.5m、最大約3.8m）によって仕切られる。倉庫1では確認できないが、他の各庫はその西側に門を設けていたことが、約15～20cm幅で溝状に残る門扉地覆痕跡からわかる。各庫の柱筋は南北にほぼ揃うが、多くの礎石はすでに抜き取られていた。残存する礎石は、その大きさ・形状が一様でなく、統一性を欠く。別の場所で使われていたものを集積し、再利用したことを窺わせる。床面に塼や石を敷いた痕跡は認められなかった。なお床面・壁面は一部赤変し、礎石上や門扉地覆溝にも炭の堆積が確認できることから、火災を被ったことは確実である。王莽の時の焼失によるものか。

塼積排水暗渠　倉庫7の床面から約1.0m下で検出。東から西へ流れる。長方形塼を北側に6段、南側に7段積み、さらに子母塼33枚をアーチ状に組み天井とする。規模は外法で高さ約1.4m、幅2.0m、内法で高さ幅ともに約1.1mである。暗渠内は、自然堆積により埋まっていた。

遺物　軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼などの建築資材のほか、甲冑や鏃などの武具や武器、土器が出土した。

まとめ　本年度の調査によって、桂宮北方地区における収納保管施設の存在が判明した。桂宮の中枢部の構造を明らかにした前年度までの知見ともあわせ、桂宮の全体構造を考える上で、貴重な知見といえよう。ただ、これらの倉庫の具体的な性格については明瞭でなく、また、桂宮全体のなかでどのような位置づけとなるのかなど、今後の検討を要する課題も多い。

（小澤　毅・山下信一郎/飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

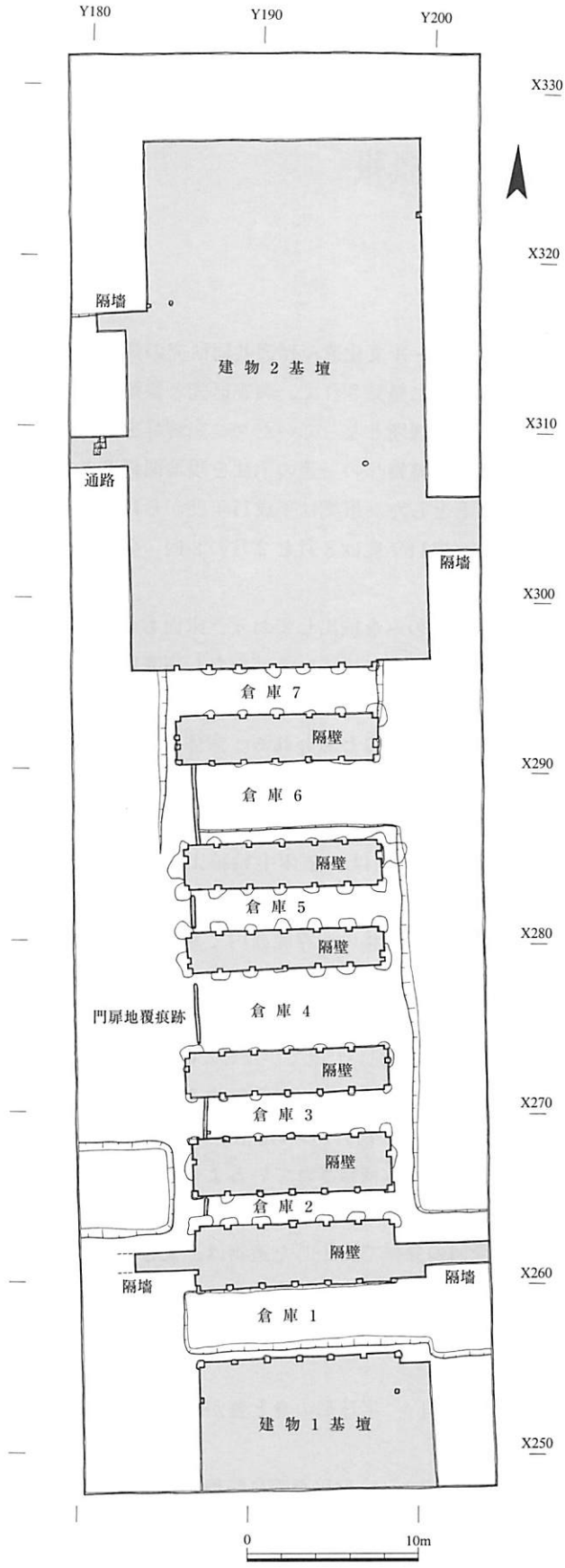

図4　桂宮3号建築遺跡遺構図　1：400
座標は未央宮前殿にある基準点に基づくもの。下3桁のみ表記